
悪魔でもバスガイド

キオナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔でもバスガイド

【Nコード】

N6455Y

【作者名】

キオナ

【あらすじ】

引き籠りがちで人と接するのが苦手な少年、しじまぐろの降魔黒乃。

そんな彼の唯一の心の支えは人気カードゲームの萌えキャラクターであり脳内彼女であるフィンディとのラブラブ生活を妄想する事だった。

いつも通り自宅で一人彼が部屋で妄想をしていると玄関のチャイムが鳴る。

人と接したくない彼は当然無視するが、次第にチャイムの鳴るペー
スが早くなりドアノブが何回も回される。

それでも彼が無視していると、無理矢理玄関のドアが破壊され誰かが入って来た。

黒乃は怯えて布団の中に隠れフィンディに助けてを求める。
遂に黒乃の部屋の扉が開き、誰かが黒乃の布団を剥ぎ取った。

黒乃が恐る恐る侵入者の正体を確認すると、そこにいたのは実在しない筈のフィンディが笑顔で立っていた。

フィンディが語るには黒乃を地獄のバスツアーに参加させる為に迎えに来たと言う。

(1 - 1)

「フィンディはやっぱりツインテールの方が似合ってるよ？あ、でも君ならどんな髪型でも可愛いよ？本当だって。」

少女のイラストが描かれた厚紙と楽しそうに会話しているこの少年の名前は降魔^{リマクノ}黒乃。

彼はもう半年以上学校には行っておらず、人気カードゲームのキャラクターと愛し愛される妄想をしながら毎日を送っている。

彼は元々現実世界^{リアル}の女子も好きになれる普通の男の子だったのだが、好きだった女子が転校してしまい、それならばと何処へも行ったりしない2次元の女の子を愛する事に決めた。

彼が不登校になってしまったのは特に苛めや嫌がらせがなかったからでは無く、単純に脳内嫁との生活に嵌まって抜け出せなくなってしまうことからである。

因みに彼がフィンディと呼ぶのは茶髪でツインテールの女の子がバスガイドのコスプレをしているカードで、本来このカードの名前は“悪魔でもバスガイド”だ。

フィンディとは英語で悪魔のような人を意味する“Fiend”を元にして彼が名付けた名前で、この名前を考えるのに約1日も掛けた。

それから30分程経過した時だっただろうか、彼がフィンディに一方的な会話をしていると、自宅のチャイムが突然鳴り響いた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 2)

「誰だろっこんな時間に？ねえフィンディもそう思うよね？」

黒乃は普段から人と接するのは苦手なので家の電話やチャイムが鳴っても絶対に出る事は無い。

いつもは彼の母親が対応しているのだが今日は映画館へ外出中で不在だった。

母親が不在な事を知っていても勿論彼は無視に徹する。

彼は普通の高校生なら学校へ行っている時間帯なのにも関わらず自分が家にいるのは可笑しいと思われるのではないかと不安を抱いており、同時に人前で上手く会話出来ないのではないかという不安も抱いている。

訪問者は誰も出ない事に対して腹を立てているのかチャイムを押す間隔が速くなりドアノブを激しく動かして耳障りな音を立て始めた。しかしそれでも無視をしてフィンディとの妄想に浸っていると訪問者は諦めたのか急に降魔家は静まり帰るが、その直後玄関のドアが吹き飛ばされ誰かが笑い声を挙げながら家に侵入した。

侵入者の笑い声は女性であり、その不気味な笑い声と共に足音が黒乃の部屋へと近付いて来る。

黒乃は今まで味わった事の無い恐怖感に支配され、布団に包まってフィンディに助けを求めた。

遂に侵入者は黒乃の部屋へ辿り着き、扉を開けて小刻みに揺れている布団を見つけると突然毛布を掴み投げ捨てた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

毛布を剥ぎ取られても尚、黒乃は目を閉じていたが数十分経っても侵入者からのコンタクトは無く聞こえて来たのはため息の様な音だけだった。

彼は何もされない事を逆に不気味に感じたが、このまま寝たふりをしているも解決がしないのは分かっていたので勇気を振り絞りゆっくりと重い目蓋を開いた。

暫らく目を閉じていた所為で霞んだ視界に映っているのは彼が大切になっているフィンディのカードを怪訝な表情で持っている少女だった。

自分の目に映る少女の姿を見て驚愕した彼は何度も確かめる様に目を擦って確認した後、無意識に一言呟く。

「本物の…フィンディ…!?!」

その言葉を聞いた少女は満足気に頷いて頬を赤らめた。

彼の言った通り、まるで最新の3D技術で投影されたのではないかと疑いたくなってしまう二次元の架空のキャラクターフィンディが椅子に座っていた。

彼女は骸骨の意匠が施された青いバスガイドの制服を着たやや赤みがかった茶髪のツインテールに大きな真紅の瞳…と明らかに現実世界^{リア}の人間ではない風貌だった。

この時黒乃の中にあつた恐怖心は既に消し飛んでおり、確かにそこに存在しているフィンディを色々な角度から疑望した後、投げ捨てられていた毛布を拾って布団の元へ行き再び包まって眠った。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

フィンディは再び布団に包まった黒乃を見るなり椅子からすくつと立ち上がり、今度は彼ごと毛布を掴んで投げ飛ばした。

投げ飛ばされた黒乃は部屋の窓ガラスを割って突き抜け、ベランダに転がった。

ベランダに飛ばされていた彼は暫らくの沈黙の後、毛布を被りながら地を這う様に自分の布団のある場所に帰ろうとしたが途中で力尽き気絶してしまった。

気絶してから約3時間後、黒乃は目を覚ました。

ふと窓の外を眺めると外は真っ暗になっており、窓ガラスも修復されていた。

やはり夢だったのかと彼は嬉しいのか悲しいのか判別し難い気持ちを抱きつつ左手を支えにして起きあがろうとした時、何か手に変な感触の物が当たっている事に気付いた。

まさかと思い彼が恐る恐る左を見るとフィンディが恥ずかしそうな表情をしながら隣で横になっていた。

「キャハ？黒乃さんって意外と大胆ですね？」

「ほ、本物だ…本物のフィンディ…それともこれは夢の中の夢…？」

未だに黒乃はフィンディが実体化している事を信じられず、彼女の頬を摘まんで伸ばしたり髪の毛の匂いを嗅いだりしたが最終的にはどう考えても夢や幻では無いという結論を出した。

彼は突然の来訪者に対してどう対応して良いか分からなかったので彼女を座布団の上に座らせてお茶と菓子を目の前に出した。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 5)

しかしフィンディはそれに手を付けず、首を傾げて黒乃をじっと見つめている。

彼は気まずくなり一旦部屋を出て深呼吸をしてから戻るがやはりフィンディは動かず固まったままだった。

無論、彼女と話をしてみたいという気持ちは黒乃にはあるのだが普段カードにしか語りかけていない重度のコミュニケーション障害の少年にとっては高いハードルだった。

それでも彼は夢にまで見たフィンディがこの現実世界に現れるシチュエーションに胸を躍らせており、今直ぐにでも彼女を抱き締めた気分だった。

「ねえ黒乃さん何で黙ってるんですかあ？いつもは可愛いよーとか大好きだよーとかフィンディちゃんマジ小悪魔ーとか言ってくれるのにい…」

何も言ってくれない黒乃を見かねたのか、彼女は日頃自分のカードに言われている台詞の内容をわざと強調して呟きながら彼に詰め寄った。

黒乃はまさか普段何気なくカードに対して言っている言葉がその本人に言われるのがこんなに恥ずかしいとは知らず、顔を真っ赤にして涙目になった。

「な、なんで…なんで知ってるんだよ…」

「キャハ？そんなのいつも一緒いるからに決まってるじゃないですかあ？もー恥ずかしい事言わせないでくださいよー黒乃さん？」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

動揺している黒乃に更に追い打ちをかける様に彼女はその後も彼に言われた台詞を何回も言い続けた。

だが黒乃は遂にフィンディの言葉責めに耐えられなくなって部屋を飛び出し、玄関の扉を開けてそのまま走り去ろうとしていた彼だったが、家の前に停まっていた巨大な物体にぶつかり鼻血を噴き出して倒れた。

通れる筈の道が通れないとは一体何事かと彼は起き上がって前方を確認するとそこには真黒に染まった怪しいバスが停車していた。あまりにも可笑しい状況に黒乃が呆氣に取られて口を大きく開けたまま凝視していると、背後からフィンディがバスの前まで歩いて来てフラッグを小さく左右に振った。

「地獄のバスツアーへようこそ黒乃さん？」

「地獄の…バスツアー…！？ひええ！僕を殺す気だなこの悪魔！人でなし！」

「キャハ？その通りあたしは人じゃなくて悪魔ですよ？あ、でも大丈夫？大事な未来の旦那様を殺したりなんてしませんから」

黒乃は何故こんな事になってしまったのか原因を探る為今まで自分とフィンディが繰り広げた妄想会話を再生すると、3日前に彼女がガイドを務めるバスツアーへ行ってみたいと言っていたのを思い出した。

甲斐性が無い彼がそんな突拍子も無い事を言っていたのは、妄想の中ですら何を言っても構わないと思えたからであり、まさか本当に行く羽目になるのなら彼は絶対に言わなかっただろう。

>
 i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

(1 - 7)

だがそんな約束よりも今フィンディがとんでもない事を言った事に彼は自分の耳を疑った。

確かに彼女は彼に対して“未来の旦那様”と言ったからだ。

黒乃はいつも妄想で彼女に僕のお嫁さんになって等のアプローチをした事はあったが、彼女の口から自分を認める言葉が聞ける日が来るとは夢にも思わなかっただろう。

この会話だけなら彼は幸せ者なのだが、そもそも何故架空の存在であるフィンディが実体化して彼を迎えに来れたのが不明なままであった。

「ねえ、どうして君が現実にいるの？正直訳が分からないよ。」

「良い質問ですねえ黒乃さん？あなたが持っているあのカード、実はあたし　　とと危にゃい危にゃいうっかり口を滑らせる所でした？ってな訳で内緒です、内緒？」

結局黒乃の最大の疑問は有耶無耶にされ闇に葬られた。

ただ一つ確信したのはそれを言おうとした時のフィンディの顔は強張っており、聞いてはならない真実であるのは間違い無い。

彼は前にかなり怪しいが死ぬ程愛しているフィンディ、後ろには安全だが平凡な家のどちらかを選ばなくてはいけない究極の選択に迷っていたが、善く善く考えてみれば家を選んだとしても先程の様に強行手段で家を破壊され連れて行かれるのは間違いなさそうなので彼女に言われるがまま大人しくバスに乗り込む選択をした。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

黒乃が乗り込んだバスの中には誰も乗車しておらず、運転手もいなかった。

立っていても仕様が無いので彼は一番前にある右の窓側の席に座り、頼杖を突いて外の景色を眺めているとエンジンの音も掛かっていないのに勝手にバスが動き始めた。

座っている彼の隣の席にフィンディが飲み物の入った紙コップを二つ持って座り、片方を彼に渡した。

それを受け取った彼が中身を覗くと異様に青い絵具の様な液体が入っていた。

「ちよつ…何なのこれ？どう見ても飲み物じゃ無いよねこのエイリアンの血液みたいなのだ。」

「キャハ？これは地獄名物の天使の生き血で〜す？あ、隠し味にいいんや　ウフフ？」

天使の血は青いという事実にとっても残念な気持ちになった黒乃は無言で紙コップをフィンディに返した。

しかし実際は最初は透明だった炭酸飲料水に彼女が大量の惚れ薬を投入してただけで本当は天使の生き血や地球外生命体の血液でも何でも無くただの彼女の欲望の塊だった。

その後彼は自分の飲み物の色が彼女の物と違う事に気づき、冷めた態度でそれを指摘すると彼女は慌てて彼に普通の飲料水を渡した。

「そろそろ来ますので黒乃さん？ちゃんとシートベルト付けてくださいね？」

「来るって何が？誰か来るの？」
> i 3 5 3 1 0
— 4 3 7 1
<

フィンディが黒乃にシートベルトの着用を促すと、急にバスは道路より遙か上空に昇って辺り一面光に覆われたかと思うとバスの前に大きな赤い門が出現し、バスはその中へ吸い込まれるかの様に入って行った。

黒乃はこの時やっとシートベルトを着用する意味を理解したが、既に座席から落ちていたので意味は無いに等しい。

そんな彼を余所にフィンディは呑気に饅頭を食べながら謎の言語で書かれた雑誌を読んでいた。

「おい！それでも君はバスガイドかーっ！」

「キャハ？心配しなくても黒乃さんの分のお饅頭もご用意してありますから？はい、あーん？」

「あーん…じゃないよ！僕が言いたいの客の心配ぐらいして欲しいって話！」

彼女は黒乃をからかって面白そうに笑っていた。

黒乃はそんな彼女の態度が気に入らなかったのか自分の座席に戻り、隣に座っている彼女の方を見ない様に体を右に傾けて窓の外を眺めるとそこには美しい花々達が咲き誇っており、一般的な地獄のイメージとは掛け離れた光景だった。

興味津津になっている黒乃の肩にフィンディはもたれかかりながらこの場所の説明を始める。

「右手に見えますのはムーリトクスエ高原　ここは地獄に生息している全種類の花々が集まってまーす？左手に見えますのはリトクビ

I 村 ここは人口約200人の小規模な集落ですが、シクレタイト
という特殊な鉱石の加工技術を持った職人さんがいるのはこの村だ
けなんですよ？」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

フィンディが説明を終えるとそれまで空中を浮遊していたバスは急降下し、近くの村付近へ着地した。

勿論何も教えて貰えなかった黒乃はまたも吹き飛ばされそうになったが、今度は彼女に息が出来ない程に抱き締められたので吹き飛ばされずに済んだ。

黒乃は行き過ぎた愛情表現をする彼女を無理矢理引き離そうとするが、知恵の輪の様に体を絡ませられて解けないので仕方無く彼女を不格好に抱えたままバスから降りた。

外に出ると2人の前に1人の若い女が跪いており、フィンディは黒乃から降りて不敵な笑みを浮かべながらそれを一瞥すると女が前へ歩み出て口を開く。

「ようこそ我が村へおいでくださいました姫さ」

「は、早く案内してくれない！？あたしお腹空いちゃった！」

この時黒乃はフィンディが実は身分の高い者であることを隠していた事と話を逸らした事を問い質したい気持ちだったが、2人の会話に口を挟む勇気が無かった為叶わなかった。

女に案内されるがまま黒乃がフィンディと村へ足を踏み入れると、待ち構えていた村人達が手を振ったり拍手をして盛大に歓迎している。

村人に見送られながら3人は更に先へ進むと赤い看板が施された小さなレストランがあり、そこまで案内すると女はフィンディと黒乃にお辞儀をして去って行った。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 1 1)

フィンディに手を引っ張られて黒乃はレストランの中へ入り、彼は入って直ぐの所にいる受付嬢を見るなり目を輝かせた。

実はその受付嬢は黒乃がフィンディ以外に溺愛している美少女キャラクターのカード“ ロロタル ”で、銀色の長い髪にオッドアイ…但し基本右目に眼帯を付けているのが特徴で黒乃は彼女をろったんと呼んでおり脳内設定では超ドS少女である。

「やっぱりカードで見るよりも可愛いなあろったん…ああその細い足で踏まれてみたいなあ…えへ…」

「チツ…（あたしと会った時はあんな風にデレデレしなかったのに…あんな女の何が良いですか…）」

黒乃の態度を見て不機嫌になったフィンディは彼を足で踏み付けて痛がっている隙にその場から連れ去り奥の食堂へ向かった。

テーブルに着くと豪華そうな料理が次々と運ばれて来るが、そのどれもこれも黒乃のいた世界では見た事が無い食材が使われており不安だったが、フィンディの様子を覗くと美味しそうに食べているので彼は戸惑い一つも口に運んだ。

「あれ？味があんまりしないなあこの料理…」

「あ、言い忘れてましたけど悪魔の味覚は人間よりも発達しているので料理も基本薄味なんですよ？だから人間の黒乃さんのお口には合わないかもです？」

その後のフィンディの話によれば悪魔と人間は髪や瞳の色を除けば

外見は何も変わらないが味覚・嗅覚・視覚に関しては悪魔の方が発達しているらしい。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 1 2)

味がしない所為で満腹感が得られない食事を済ませた黒乃はトイレに行くと言を付いてこつそり受付にいるロロタルに会いに行った。だが彼にはロロタルに話し掛ける勇氣は無く、遠目に見つめているだけの宛らストーカーの雰囲気醸し出していた為、他の客や店員から白い目で見られていたのは言うまでも無いだろう。

黒乃は諦めてテーブルに戻ろうと振り返ると背後には殺氣を纏ったフィンディが優しく微笑みながら立っていたので気付いていない振りをして歩こうとしたが、抵抗虚しく彼女に椅子に縛られた揚句心臓の前にフォークを突き立てられた。

「問題です？さつき黒乃さんは誰を見ていたんですかあ？1・あたし 2・フィンディ 3・マジ小悪魔…さあ何番ですかあ？もし不正解だったら黒乃さんは綺麗な赤に染まります？」

「じゃあ4番のメンヘラフィン ってやめてやめて冗談だつて冗談！本当にちよつと刺さつてるって！真面目に答えるから殺さないですよ！」

「キャハ？どうせ黒乃さんは妄想の中で色んな女を誑かしてる変態さんですもんね？やっぱお仕置きが必要みたいです？」

「ひい…この悪魔あ…」

その後黒乃は椅子に縛られたまま約1時間外の目立つ場所に放置された。

彼は通りかかった人々に助けを求めたが、フィンディが村人たちに助けてはいけなさと釘を刺していたので相手にされなかった。

>
 i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

(1 - 1 3)

お仕置きを受けた黒乃はフィンディに連れられて村の中でも一際目立つ大きな家に訪れ、彼女が家のドアをノックすると中から厳格そうな老人が顔を出して2人を家に招き入れてくれた。

老人は2人を客室に案内してソファアに座らせると、布で包まれた細長い1m程の棒の形をした物体をフィンディに受け渡した。

「フィンディ、この人は？それに何これ？」

「申し遅れました、私この村長を務めておりますストウス・ムーリトクスエです。そしてこれは我が村に代々受け継がれる鉱石の加工技術を応用して生成された剣です。」

「フフ、何で剣なのって顔をしてますねえ黒乃さん？これをこの国の最北端にある城におられる父う　魔王様に届けられればなんとあたしと黒乃さんは夫婦になるのを認めて貰えるんですよ？」

「ぶっ！夫婦！？そ、そりゃあ嬉しいけど…僕高校生だし働いてないし根暗だし引き籠りだし頭悪いし格好良くないし運動神経皆無だしえーっとそれからそれから　とにかく僕なんかじゃ無理だろう…」

どうやらフィンディが黒乃を地獄に連れて来たのは観光目的ではなく、彼を自らの夫にする為の作戦であった様だ。

だが妄想の中では男らしい黒乃でも現実では自分に自信が全く無いマイナス思考の人間である。

そんな彼の態度にフィンディは怒る所か惚れ惚れしており、ある意味2人の相性は抜群に良いのかも知れない。

>
 i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

村長の好意で2人は彼の家に泊まって行く事になり、黒乃がシャワーを浴びて部屋に戻るとベッドの上に妖艶な着物を着たフィンディが無防備に眠っている。

部屋はベッドが一つしか無い相部屋の為、必然的に2人で一緒に寝なければならぬ。

彼女を見ている内に黒乃は興奮して性的欲求が芽生え、暴走する前に何とか彼女を襲いたい衝動を抑えて部屋から飛び出しソファで眠ろうとした。

しかし何時間経ってもフィンディの姿が頭から離れず、遂に理性を失い雄の本能に目覚めた黒乃は眠っている彼女に目を閉じて口付けをしようとするが何故かあまり柔らかく無い感触だけが彼の唇に伝わって来る。

嫌な予感がした黒乃が目を開けるとフィンディが悪戯な表情をしながら人差し指で彼の唇を押えていた。

「キャハ？ いけませんよお黒乃さん？ こーゆーのは結婚してからにしましょうねえ？」

「ち、違う！ これは不可抗力で…お願いだからそんな目で見ないで…」

黒乃の欲求はフィンディによってあっさり打ち砕かれ、悶々としながら彼女と共に一夜を過ごした。

昨晚の一件で全く眠れなかった黒乃は気持ち良さそうに寝ているフィンディに少し腹を立てていたが、悪魔なのに天使の様な寝顔をしている彼女を見ていたらどうでも良くなってしまった。

彼が暫らく部屋でぼーっとしていると村長の妻が部屋に入ってきて

フィンディを優しく起こそうとするも中々起きない。

「朝でございますよ〜?」

「んにゅ…後5分う…」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

村長の奥さんが腕に縊りをかけて作った朝食をご馳走になった黒乃とフィンディはお世話になった2人にお礼を言つてムーリトスクエ家を出た。

村を鼻歌を歌いながらご機嫌に歩くフィンディの後ろでは重たい剣を抱えながら黒乃は亀も顔負けの鈍さで息を荒くして歩いていると前方から村人達が悲鳴を上げて走つて来る。

その勢いで黒乃は激しくぶつかられて持っていた剣が遠くに飛んで行つてしまい、彼は剣が飛んで行った方へ全力で向かつて行くと甲冑を来た3人組の女達がそれを拾つて去ろつたので大声を張り上げて呼び止めた。

「す、すみません。それとっても大事な物なんです…返してくれませんか？」

「生憎私達も姫が大事なのでな。貴様の様な貧弱な若造にこの国の未来を託す事は出来ん。」

今までフィンディが優遇されていたのは実は彼女が魔王の娘であり、この国の未来を担う次期王位継承者となる黒乃を歓迎していたからである。

しかしこの3人組と同じ思想を持った反対派も勿論おり、反対派は魔王の命令で剣を奪いに来るので無事に剣を魔王に譲渡するのは険しい道だろう。

そんな黒乃と女の会話の一部始終を遠くから見ていたフィンディはそれまで黒乃が見た事が無い程の恐ろしい形相をして3人組に歩み寄った。

「ねえその剣を返して？返してくれないとあたしあなた達を殺しちゃうよ？」

「しかし姫！こんな男では　っ…分かりました。ではこうしましょう？今から2日以内にリトクビー高原に咲くブラッディリスを摘み採ってここに持って来てください。そうすれば剣をお返ししましょう。但し行くのはこの男だけ、姫は一切手伝ってはなりません。」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

黒乃は何故花なのかと疑問に思ったが、女が語るにはブラッディリスには花言葉で“犠牲の上にある愛”という意味が込められており、それを異性に渡すのは黒乃のいた世界で言うプロポーズであるらしい。

ここまでの話なら簡単に済みそうだが、この花は見つけ出すのが大変困難で一般的に4ヶ月は掛かると言われているので2日間で見つけるのは不可能に近く実はかなり無茶苦茶な要求である。

当然女もそれを知った上で要求したのは黒乃に王たる資質があるかを見極める為で、仮に見つけられなかったとしても彼の努力次第では剣を返すつもりでいる。

フィンディは終始無言で黒乃をリトクビー高原へバスで送り届け、それまで彼に見せた事の無い悲しそうな表情をして帰って行った。

「はあ…あの人の言った通り僕なんかじゃ釣り合わないよ。それにフィンディとこの国の幸せを考えたら僕は早くこの世界から消えた方が良くのかも　って何で僕はいつもこうネガティブなんだろう！こんな性格だから何をやっても駄目なんだよ！さ、時間が勿体無いし探しに行こ。」

独り言をばやきながら黒乃はブラッディリスの写った写真と付近に生えている花々を見比べながら腰を曲げて歩き周った。

数時間探し続けて疲れ切った黒乃が芝生の上で横になって眠っていると誰かが彼の顔の前に水と食べ物を置いてそそくさと去って行ったが、それに彼が気付いたのはそれから翌日の朝である。

眩い朝日に照らされ黒乃は無駄に一日を寝て過ごしてしまった事に気付く後悔したが、悔やんでいても仕方が無いのは分かっていたので重い体を無理矢理起こして必死に探した。

>
 i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

ごつごつした岩が無造作に転がり凹凸になった地面やまるでゲームのダンジョンの世界を体感している肥沃な森などありとあらゆる場所を行ける範囲で黒乃は探索したが、似た色の花くらいしか見つけられず半ば諦めた状態だった。

しかしそんな気持ちになる度に彼の脳裏にフィンディの笑顔が過ぎり、諦める事を踏み留まらせた。

俯いて歩いていた黒乃がふと前を見るとやたら細長い耳を持った黒猫が座っており、彼の姿を確認すると突然鳴き声を上げながらまるで付いて来いとも言っているかの様に駆け出して行く。

「ま、待つてよ！はあはあ…速いつて…！」

黒猫はぴたりと動きを止め、黒乃の方へ振り返る。

そこは断崖絶壁の今にも崩れそうな行き止まりの道だったが、黒乃が目を細めて見ると向こうの崖に場違いな程綺麗に佇むブラッディリリスが咲いていた。

だがそれを採るには落ちたら最期の2mの距離を飛び越なければならず、そう簡単に決心が出来る行動では無い。

ましてや今までの人生で命所か何も賭けて来なかった彼には重い選択、彼は暫らく頭を抱えて自分自身と見つめ合った。

そしてふっきれた笑みをして彼は立ち上がり、助走を付ける為に後ろへ下がる。

「あそこに生えているブラッディリリスみたいにフィンディは僕じや一生届かない高嶺の花なのかも知れない　けど、君を想って死ぬるなら良いかっ！」

そう言い終えると黒乃は限界まで助走を付け向こうの崖に目掛けて高く飛んだ。

彼は無事着地しブラッディリリスを摘み取ると一気に体中の力が抜けて倒れ込む。

しかし安心したのも束の間、崖がバラバラに崩れ落ち彼は果てなく続く暗闇の中へ吸い込まれて行った。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6455y/>

悪魔でもバスガイド

2011年11月23日19時54分発行